

## 春にして『テル』を想う(H. Honda) [J]

昨年秋に出版した翻訳書『ヴィルヘルム・テル』<sup>1</sup>についてコラムを書かせてもらうことになった。今回執筆するエッセイは、国会図書館の事業によって永遠に残ると教えられた。下手なことは書けない、ということである。困った。下手なことしか書けないのに。そして悩んだ。これまでエッセイみたいな論文ならいくつも書いたことはあるが、エッセイというものを書いたことがないからである。そこで、青春時代の読書体験から、なぜ僕がドイツ文学に至ったのか、そしてなぜフリードリヒ・シラーの翻訳を出すことになったのかを、綴ってみようと思う。



小学生の頃、『まんが 日本の歴史』シリーズや世界の偉人の伝記を読むのが好きだった。今では何も覚えていないが、キューリー夫人やエジソン、平将門、織田信長や豊臣秀吉などの歴史というか物語を読むのが楽しく、繰り返し読んでいたのである。中学生になってからは、古事記、源氏物語、枕草子、徒然草などの古典の漫画を読むようになった。父が一冊一冊と買って来る度に、楽しく読んだ。そんな漫画ばかり読んでいけるせいか、バカで勉強は出来なかったが、少し手を広げ、阿刀田高、西村京太郎、山村美紗などの作品を読み続けた。文学って面白いな、と思った。そして、受験勉強をしなければならぬ中三の夏、初めて外国の小説を読むことにした。夏休みの宿題としての読書感想文のためである。まず手に取ったのは、ツルゲーネフの『初恋』。あっちの文学も面白いなと感じた。次に手に取ったのがヘッセの『車輪の下』だった。

これがいけなかった。内容的には、当時受験生だった僕の立場に重ね合わせることができたため、感銘を受けたのだが、ある個所が気になってしまったのだ。今では記憶があいまいであるが、おそらく「これは僕に気に入った」、というような日本語だった。言っている意味はわかる気がするけど、こんな日本語使う？と当時の僕は思った。翻訳の失敗？日本語がおかしい？いや、地の文に見事に融和している自然描写は素晴らしいし、ストーリー展開も違和感がなく、面白い。いったい「原語はどうなっているのだろうか？」と考え、この小説を原書で読んでみたいな、とってしまったのである。ずいぶん昔のことなので、本当にそんな翻訳がされていたかどうかは今となっては確かではないが、とにかく原語で『車輪の下』を読んでみたいと思ったことだけは確かである。だから英語を頑張ってみた。すると、できなかった英語も、be 動詞からちゃんと覚え始めたので、夏休みの1ヶ月間で中学英語ができるようになったのである。モチベーションとは、やはり大事なものである。大人になってからもこんなモチベーションが欲しかったものである。神は残酷だ。一気に英語の基礎を固

<sup>1</sup> フリードリヒ・シラー 本田博之訳『シラー戯曲傑作選 ヴィルヘルム・テル (ルリユー  
ル叢書)』 幻戯書房 2021年。

めたので、高校に入ってから英語の成績はいつも良かった。ボーカルとして参加していたロックバンドの選曲にも英語の曲を取り入れ、水泳部の筋トレでは皆で英語の曲を歌いながらスクワットをするなどして、このまま行けば、きっとヘッセも読める、とさらに意気込んで英語を勉強し続けた。だが、ある時、重要なことに気付いてしまった。ヘッセはドイツ人で、なんとドイツ語という言語で小説を書いていることである。

バカだった中学生の僕は(今もバカだが)、外国人は誰でも英語を使っているものだと思い込んでいたようである。きっとグローバリゼーションの弊害である。当時はもう英語が好きになっていたのだから、高校を卒業したら英語学科のある大学に進学して、英語を学ぼうと考えていたのだから、この事実は大誤算であった。そうこうするうちに、大学には第二外国語の授業があることを知った。それならば、英語学科に入って、第二外国語でドイツ語を取ろうと考えた。しかし、不幸にも英語学科は不合格で、しかたなくドイツ文学科に入学した。

大学に入学すると、周りの誰もヘッセなんか読んでなかった。きっとこいつらは『デミアン』や『シッダールタ』を楽しめるほどの豊かな想像力がないのだと内心罵った。しかし、学科で勉強していくうちに、幸いにもトーマス・マンの『魔の山』に出会い、ユーモアもある深淵なあの世界に惚れた。短編も長編も面白いマンの作品は、かなり読んだが、そのうち、マン関連で何度も目にするフリードリヒ・シラーに興味を湧いてきた。そこでまず、『ヴェニスに死す』でマンも触れているシラーの美学に注目し、なんとなくシラーを読んでいたら、いつのまにかシラーを研究することになってしまったのである。

それから紆余曲折あり、10年ほど前からは、『ヴィルヘルム・テル』を中心にシラーの戯曲に対してさまざまなアプローチを試みてきた。何年にもわたって研究してみると、やはりシラーの戯曲は、月並みな表現ではあるが、奥が深く面白いことがわかってきた。ドイツ語の言い回しから言えば、『メアリー・ステュアート』のセリフの方が心地よく響き、この戯曲の方が好きなのであるが、翻訳書を出版するという観点からは、日本では(シラーの他作品に比してとりわけ)有名なウィリアム・テルの戯曲を新しく翻訳する方がいいと思われた。

翻訳に際しては、とにかくわかりやすい文章をこころがけた。これまで某大学の文学演習で何年も学生たちと読んできた経験から、学生たちが古い翻訳書を読んでも理解できない箇所、困難を覚える箇所がだんだんとわかってきたからである。そのため、原書を読む際の一助となるように、できる限り訳注を付した。ところで、僕が中学生時代に感銘を受けたヘッセとシラーには何のつながりもないように思われるが、実はどちらもシュヴァーベン出身である。ヘッセの大先輩であるシラーは、残念ながら(幸運なことに)神学の道は諦めざるを得なかったが、『車輪の下』で少年ハンスが神学校に進む道が描かれているように、少年シラーも同様の道を目指していたのである。こうしたシラーの生涯について詳しくは、拙訳書のシラー年譜をご覧ください。パンデミーと戦争勃発という閉塞感のある今、理想主義で何が悪い?というくらいの気持ちで、シラーの名作を拙訳で楽しんでいただけたら幸いである。

本田博之（上智大学非常勤講師）

0185

作成日 : 2022/04/10